

The Classical Collections of Sherlock Holmes
2018
Edited by Naohiko Kitahara

目次

乞食道楽（訳者不詳）	7
暗殺党の船長（南陽外史訳）	39
新陰陽博士（原抱一庵訳）	53
快漢ホルムス 黄色の顔（夜香郎 〓 本間久四郎訳）	149
禿頭組合（三津木春影訳）	185
ホシナ大探偵（押川春浪訳）	213
肖像の秘密（高等探偵協会編）	247
ボヘミヤ国王の艶禍（矢野虹城訳）	317
毒 蛇（加藤朝鳥訳）	347
書簡のゆくえ（田中貢太郎訳）	385
十二時（一花訳）	411
サン・ペドロの猛虎（森下雨村訳）	441
這う人（妹尾アキ夫訳）	485
編者解題	512

シャーロック・ホームズの古典事件帖

凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」（昭和六一年七月一日内閣告示第一号）にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。

乞食道樂（訳者不詳）

セントゼオーヂ大学にて地質学に名を得しエリアスホイトニイの兄弟にてアイサホイトニイといしは甚しく阿片烟に耽り家をも身をも忘るるに到れり。かかる慣習を生ぜしもとはわけもなき戯よりのことにてかのクインシイの人種談を読みてタバコをラウダニユムに取換て試みしに初り今はその嗜好は益つりの実際これをやむることはかたくこれを遂るはやすしといふべき場合に陥りその朋友親族の畏懼と悲哀との中にありてこの毒物の奴隸となり果たり。その顔色は黄ばみて板目紙のごとく醜は眼を掩いて僅かに針のごとき眸子常に椅子にのみもたれて貴人の風症に中れるごとし。

頃は八十九年七月の夜のことなり。表に鈴のなる音して人の入来るけはいす。予は第一に欠しなから時計に目を属するに早十時を過たり。妻は傍にありていまだ針仕事をやめず。

暫くして戸の開くを見たり。人をおそるるがごとき物いいはしかと聞とれず。見れば雲雀色の服を装い黒き覆面したる一婦人部屋に入来れり。

「晩く上りましてすみません」といい初し。もはや我まんならずと見え進てわが妻の頸に手をかけ肩に頭をもたせて「どんなに心配でしょう。たすけて」とゆきなりに泣出す。妻はその覆面をとりて「オオ、ケートさんびつくりしました。今頃御出で」

「わたしはモウどうしてよいかわからないから一目さんにおまえのそこへ来たの」とはいつものこと

にて困くるしいときは我妻を燈明台としてとまる海の鷗。

「そうですか。マアそのコップに葡萄酒へ水でも入れて御上り。そして気を落付てから御相談の事はどうかまたどうしようとか御はなしをしましょう。やどが寐ましてからでも。わたしはこのゼームズを寐かして来ますからすこし」

「イエイエわたしはおまえよりかきようは先生の御知恵が拝借したくまた御助けをも願うのです。それはいつもの通りイサの事です。モウ今晚で丸二日かえりませぬ」

この婦人のその夫のことにて我々夫婦に訴えることは今に始りしならず。つねに予を先生と称し我妻はそのむかし学校友達なれば心やすくはなしあうなかなり。予はさてはと見てとり只管ひんぎこれを慰めてその心を安んぜしめんとせしは夫の居所のわからざればそれを連歸りてかの手に渡さんすべもなし。しかし彼たしかにしかしいし事あり。下町の東のはてにて阿片を用ゆるための一つの穴ありていつもそこに終日閉籠りて気ぬけのした体にて夕方帰りなりとて立よれることあり。いずれその穴にちがいなし。

そのはなしの通りその穢きたなき内に今毒を呼吸して眠こけて四十八時間かしこにあるならんといえはその妻もしかあるべしという。そは上シツンダンレーンの黄金亭という所なり。されどその妻のまだうらわかき身を以てかかる無頼漢の寄合う席に踏込でその夫を引出し來ることの出来べきや。

無論予一人にて赴くべし。妻を伴わざらんには彼もし歸ることを肯がえんぜざるようの事あるまじきか。イヤあるまじ。かれは健康上予を頼むものなり。かれが身の上には予頗る勢力ありとおもい直してホイトニー夫人には「家に帰りにて御待あるべし。今より二時の内にきつとその夫を送り帰すべし」と約して予はこの安楽なる家を立出たらいでてこの迷惑なる使命を帯び東の町はずれ不測の地に赴きぬ。名にしお

う場所なれば定めて思の外の事もあるべしとおもえば心やすからず馬車を駆りぬ。

予が勇往せし一路何の故障もなくスウアンタランの上手籠動橋の東方川の北側にて高き物揚場あるうしる陋いびしき小巷。出来合衣服の舗みせとチン酒屋の間の往まぎあたりには往古穴居の名残りともあやしまるる穴のごとき戸口よりだらだら下りの石段。これ予が搜索を要する所なり。即大胆にも馬車を表にまたせおきて踏くほめたる石段を酔人の歩むのごとく一步一步に身の中心を保ちながら踏しめ踏しめ下り行戸口の上にある油燈の閃く先をたよりに奥深く入込いりこみて見れば低き坐敷の一間阿片の烟深くこめて移住民を運搬する船の甲板のごとく板にて張たるのみにて地氈ちせんの布しきあるも見ず。その幽暗なる所に己がじし肩を枉まげ臂ひじを彎ひまし頭を下に顛あごを上には様々のなりして臥しおる人々の前に小さき紅の輪をなせる火光の間より今来れる我をすかし見て怪しめるもののごとし。これなんかの毒物を金属の管の雁首かたがしらに燃もす料しろに具そなへる燈なりけり。渠等かれらは何事かささやくあるもことの外に声低くはなしに尻声なくてきく能あたはざりしか。その行づまりの所には木炭を熾おどしある銅器ありて三叉をなせる木もてこれを支えたり。そこには背高く瘡やせほうけたる老人のその顛あごを膝の上に曲たる双の手の上に安じこれに向い居たるもあわれに見ゆ。

予がここに入るや淡黄色なる番頭マレイ人と覚しきが急きぎ烟管きせるを手に渡してあきたる椅子の方に案内す。

「ありがとう。わしはわしが友達でイサホイトニーというものが来ているはずだからそれをさがしに来たのだ」

この声をききてか予の右の脇に蠢くものあり。これぞかのホイトニーにてその色は蒼白く気ぬけしたるもののごとくその神経は痙攣こむぎせるかとおもわるる状なり。

「ワットソン先生か」と叫かけまた「先生何時でしょう」といえり。

「かれこれ十一時」

「今日は幾日」

「火曜日で七月の十九日」

「ハア水曜かとおもつた。一日ひろつた。ありがたし」というたその手を顔にあてて啜泣するがごとし。

「御はなし申すが今日は火曜日サ。君が細君は二日も君が帰りを待て心配している。君は面目ないとおもわぬか」

「そうですか。しかし君は間違えている。わしがここへ来てからまだ幾時間とは立ぬ。三服か四服アそれからさきはいくらやつたかから忘れてしまった。なるほどその内が二日か。君どうかわしと一所に帰つて下さい。ナニ、ケーテがこわいではない。かあいそうに二日二晩。アア、ケーテや手をおくれ」

そのいうこともたあいなし。

「よろしい丁度馬車が待せてある」

「では行ましよう。しかしきつと借になつてゐる。いくらなるかわしは皆無だワットソン先生」

予は打重り睡り居る人々の間をたどり氣息の塞るばかりに打こめたる烟氣に呼吸をこらえて通り過か炭火を盛れる銅器の傍に行たればそこにある背高き老人は予が裾を引てわしにかまわずといふがごとくきこえたれども声低ければよくもわからず。されど正しくかの老人より来れる声なり。かれはそのままにわき目もふらず坐しいたり。見ればその体はやせつらはいて皺だらけの顔いかにも年高く

見ゆ。阿片の煙管はその指先のつかれたるためか半ば落かかりてその膝の間にあぶなく挟りあり。予は更に歩を進めてよくこれを見て驚きの余りに声立んとせしがようあるべしとおもえば漸くにこれを忍びたり。かれはふりかえり見てその傍にだれも居らずただ予のみなりしに安心して聊かその向き齒を露したりし時は予が目には既にその皺もその瘡たる姿もなく全く我友シヤロツクホームス君なるを見たり。予は再びあたりを見て

「ホームス君。君は何の用ありてここに」といえば声高しと制して

「君あの正体なしの君の友達と同車して帰るか。しかしわしに親切があるなら一足残り給え。頼みがある」

「表に馬車があるから」

「知っているよ。何ならその馬車であの男だけ送らしてしまえ。帰りにあぶなげがないとおもうなら。そして君はいよいよわしと事を与にすることならばこれから君の細君へ一筆その馬車でおくるがよい。今夜は帰れまいから。わしの馬車も表にある。五分時間ばかりあるけば」

予はホームスのこの請を却け能わず。その故はかのホイトニーはこれをこの窟より出してこれを車中に閉込その家に送らしめば予が使命は完全を告ぐるものなり。しかして生来肝胆相許せしホームスがこの奇物に勇敢なる所業はその何事を知らざれどもこのまま見殺しになし帰られず。予は直にそのいう所を黙諾して帳場に行きホイトニーの勘定を済しその序を以て紙筆をかり受一筆我妻に書送りかの病者を馬車に扶け乗せてかの暗夜中を馳行を見とどけ再び窟の口の方に戻れば果して老ぼれたる人物の出来るあり。共に町の方へ二三町行ける間は腰をまげ足もともたしかならぬ体を装うたるもやがてあたりを見まわしてその窮屈なる界を脱し大笑の域に突入せり。

「どうだ。君は医者だが僕は阿片の毒コカインのために衰弱した人間とたしかに診察が出来るか。いいよそうなら一服もらいたい。アハハ」

「実に君にあそこで逢たには驚いた」

「しかし僕が君に遇た方が驚きはつよからう」

「僕は友達をさがしに」

「ソウきいていた。君は友達だが僕は敵をさがしに」

「エ敵とは」

「敵も敵だが僕が天性の敵。いわば天性の物ずきからの敵とねらう人。ざっといえばあの馬鹿ものからくらしている中でその敵を見付る望であった。そこがわたしのあんな真似をしていたのだがしかしその甲斐もなく一時間はむだにつぶしてしまった。全体あの狡猾者のラスカル（東印度人を卑しむ名目）めが僕が敵とねらう奴だが風をくらって逃てしまった。一体あの内には後ろにタラップドールがある。彼奴きやつそこからこの暗夜をたよりて逃出したのだ」

「君が助けるという人物は」

「ソウ先まここに一の金持があつてそれが千ポンドの金を持ってあの貧乏神どもにとられておまけに殺されたのだが中々巧なころし方であまくわなにかけた物と考えるが僕が方にもわながある」といいつつ両指を前歯にあてて清亮なる口笛を吹けばいづくにかまた同じ口笛の合図をあわせた。ほどもなく車の輪の音馬の蹄の音暗中に響けり。

「アレ御覧」とホームスが詞ことばにつづきてドグカートは暗中より突来して公園を通りて黄色なる街燈の傍に止れり。

「君はいよいよ僕につき合か^あ」

「御用になるならば」

「筆記者ではなくてはならぬ。殊に君のごとき親友ならば申分なしサ。僕は今セターに居る。丁度部屋には兩人前の寐床があるから妙だ」

「セターとは」

「それがノイタクライアの家サ。僕が探偵の用はその家のためにするのだ」

「どこ」

「レイに近い処でケントの部内だ。七里が間はこれから乗^{ゆくの}て行タ」

「すべて真暗だナ」

「勿論の事これから道々はなしをすればわかるヨ。オイ、シヨンや貴様はもう用はない。ソレ半コローン。そこであした十一時頃遇ましよう」

〔著者〕

アーサー・コナン・ドイル

1859年、スコットランド、エディンバラ生まれ。エディンバラ大学医学部卒業。1887年に初登場したシャーロック・ホームズの生みの親として知られるほか、歴史小説、怪奇小説、SF、心霊研究など多岐にわたり書き続けた。1930年死去。

〔編者〕

北原尚彦（きたはら・なおひこ）

1962年、東京都生まれ。青山学院大学理工学部物理学科卒。作家、翻訳家、シャーロック・ホームズ研究家。日本推理作家協会会員、日本古典SF研究会会長。主要著書は小説『ジョン、全裸連盟へ行く』（ハヤカワ文庫）、『ホームズ連盟の事件簿』（祥伝社文庫）、エッセイ『シャーロック・ホームズ 秘宝の研究』（宝島社 SUGOI 文庫）、編書『怪盗対名探偵初期翻案集』（論創社）、訳書『シャーロック・ホームズの栄冠』（創元推理文庫）ほか。『シャーロック・ホームズの蒐集』（東京創元社）で日本推理作家協会賞候補となる。

シャーロック・ホームズの^{こてんじけんちやう}古典事件帖

——論創海外ミステリ 200

2018年1月15日 初版第1刷発行

2018年3月17日 初版第2刷発行

著者 アーサー・コナン・ドイル

編者 北原尚彦

装画 佐久間真人

装丁 宗利淳一

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1672-2

落丁・乱丁本はお取り替えいたします